山と博物館

第37巻 第10号 1992年10月25日　大町山岳博物館

カモシカ贈呈式のあとで

右から、マルティス園長（アルペン動物園）、ターマン博士（チロル郷土博物館）、矢花弘（大町市助役）、山崎武人（大町市議会副議長）の各氏

アルペン動物園30周年記念式典にて

オーストリアのインスブルック市にあるアルペン動物園は本年開園30周年を迎え、9月22日に記念式典が執り行われた。参列者は動物園を支援するチロル州をはじめとする行政機関、団体や個人、さらにはオーストリア国内外の動物園に関係する方々である。私ども招待を受けた大町市の訪問団8名もこの中に参加させていただき盛大に式典が催された。

式典の会場はアルペン動物園内のワイヤーブルグ宮殿で、若者が奏でる音楽が式の進行を務めていた。ルッカー会長、マルティス園長、ノイマイヤー友の会会長らのあいさつがあり、最後に大町市からの記念品、ニホンカモシカの剝製贈呈という、大町への心配りの感じられるプログラムとなっていた。

カモシカ剝製の除幕をした瞬間、会場からは「オー！」という感嘆の声があがり、カモシカに対する関心の高さがうかがわれた。また、式典が終了した後にも剝製の周りには多くの人たちが集まり、ヨーロッパではあまり見ることのできないカモシカを歓迎しているようで、動物園関係者が参列した式典の一面をかいま見た。

インスブルック市側ではカモシカのお返しにクロライチョウの剝製を用意してくださった。クロライチョウはユーラシア北部に広く分布し、ヨーロッパにも生息する中型のライチョウで、全身が黒色、尾羽根の先が鎌のように曲がっている。今後、この剝製は山岳博物館に展示し、市民や大町を訪れる方にもご覧いただきたいと願っている。こうしてそれぞれの動物を通してインスブルック市のアルペン動物園と大町市の山岳博物館の友好が更に深まることは誠に有意義なことである。

インスブルックの美しい町並みと郊外の景色、そこに住む人々の温かい心のこもった歓待に接し、友好関係がより深く、より長く続くことを願わずにはいられない。

（大町市助役　矢花　弘）

ネパールの教育事情

鳥羽季義

はじめに

ネパールといえば日本人の頭に浮ぶのはあの雄大なヒマラヤの山々でしょう。そうです。山が日本人の心を引き寄せて多くの方々はその山を見たいがために、或いは登ってみようとネパールを訪ねています。または宗教、特に仏教などを求めてあの国へ行って来た人々も少なくありません。

しかしネパールは山ばかりでなく谷あり盆地あり、更にもっと広い平地が南部地方にあります。そこは一角犀や象他たくさんの動物の宝庫となっており、その密林（ジャングルと呼ばれている）がわずかに残っているのです。

当時住んでいた村の男の子に教える筆者（1971年）

この山地と平地には大勢の人々が住んでいます。美しい自然環境とその中で暮す人々を除いて、ネパールを考えることはできません。これまで多くの方がネパールの自然について多方面から書いていると思いますので、私は人を中心にして教育事情について述べさせていただきます。その中で最近注目をあびてきた環境について生徒たちに教えるという点についても新しい動きをお知らせいたしましょう。

一、学校教育のあけぼの

ネパールの学校教育の歴史は浅く、第二次世界大戦後さかんになったといっても間違いではないでしょう。その前にも一部支配階級の子弟のために作られた学校のようなものがなかったわけではありませんが、とても限られていました。トリチャンドラ大学は例外です。

もともとネパールの先住民であった山地の人々（グルン、マガー、ライ族など）は、教育といえば父親や老人が口伝えに伝達した知識や技能であり、毎日の生活に欠くことのできない事柄として教えていたようです。半分狩りで暮していた頃には、学校などによる教育は必要もなかったということができます。

ところが十七世紀頃から北インドに住んでいたヒンズー教徒がブラーミン（祭司職）を中心にして宗教教育を行い始め、その人々と関係のある民族が徐々にネパールへ移住してきて西ネパールに住みつきました。ヒンズー教の経文を読むのにはどうしてもいろはから始めなければならないわけで、子供たちが僧の所に集まり、石板を使って寺子屋式の教育が始まりました。恐らく宗教的目的（読経）だけを求めていたのであまり算数などは教えず、むしろ経文を書いた言語であるサンスクリット語を読み、意味を理解させることに焦点を置いていたことと思われます。

ヒンズー教徒がネパールの先住民を制圧するようになると、必要に応じ武士階級の人々にも初等教育や軍事訓練を与えたに違いありません。そこでは寺小屋というより確固たる形をとり、文字を教えるだけでなく算術や戦うための軍事教育もなされたことでしょう。ネパール金土征服に必要な人材が育成されました。

二、学校教育の発達

長い間鎖国を続けていた時、当時の執政者は子弟たちの高等教育（男子のみ）にはインドの学校へ送っていました。そして帰国後は国の行政に当るようになったのです。

さて開国の幕がおとされると、まず新政権が力を入れたのは教育でした。一九五一年にすでに全国の主要地に三百校に及ぶ小学校を建て、初等教育を普及させました。十年後には十倍の小学校を作り、中学校も始めています。一九七〇年に至ると更にふやし高等中学校も五十校ほどでき、この間に教師養成のために師範学校や大学も発足しました。こうしたおどろくべき教育事業に大きく寄与したのは米国の政府と専門家たちでした。

教育の急激な進展にともない教科内容も変化しました。国語、算数、理科の他、社会、英語と体育も加えられ、幅広い学校教育として形は整ってきたわけです。奇妙なことに、どういうわけか音楽が入っていません。

現在小学校は各村にあるばかりでなく、地理条件の悪い山岳地では大きな部落毎に設置されており、目を見張る程です。そして中学校は各村に建てられています。ただ問題はこんなにたくさんある学校で教育の機会に恵まれているとはいえ、教育の質といえばがっかりしてしまうと言わざるを得ないことです。辺境地では教師の給料が高いにもかかわらず、教室できちんと生徒に教えていないのをあちこちで見ました。教えてはいても国・数・理の他はあまり教えられず、高等中学校卒業試験（SLC）に合格する者は昨年三割以下でした。発展途上にある国では教科書も充分ではないようです。ネパールの民主化後一九九〇年代に入り、小学校生徒に無料で配布されるはずの教科書がまだ届いていない所もあります。特に田舎の学校はご多分にもれません。

ある村の高等中学校の落成式①（1989年）

三、私立学校の増加

公立学校を全国に作ったものの教育の質が悪いことから、人口の多い所には英語で教える学校がふえています。猫も杓子もイングリッシュ・スクールへと向かう傾向にあり、こうした学校がカトマンズ盆地では公立校より多くなってしまいました。私立校は勿論お金がかかりますので、親の負担も大きくなります。確かに教え方はよいでしょうが、貧しい子供たちはいつまでもおきざりにされるばかりです。

これは大きな問題ですが、今ネパールでそうしたことを考える余裕はありません。なぜかと申しますと、ネパールも学歴偏重に陥り始めており、しかも悪いことに少しばかり知識を持つと肉体労働をしたがらないのです。勿論、この点は日本人にも言えることかも知れませんが…。

四、大学は出たけれど

ネパールには大学は一つしかないと言えます。それは開国当時の国王を記念して作られたトリブーバン大学で、少しずつ学部をふやし、キャンパス（地方などでも学べる支部校舎）を加え全国に及んでいるのです。このような大学へ入るには高校卒業試験に合格してさえいればよく、別に入学試験があるわけではありません。毎年大勢の学生が大学に入ってきます。しかし卒業してからすぐ就職できる状況ではなく、仕事もなくぶらぶら過ごす卒業生が多くいます。農業以外の産業に乏しい国ですから、いくら大学を出たといっても雇用の道はなく、今や社会不安の増大にもつながっています。

こうしたことから人材流出もさけられません。インドなどの外国へ出ようとする青年たちは無数におり、私も日本に仕事はないか、紹介して欲しい、連れていってくれなどと頼まれることも少なくありませんでした。

今の政府はこうした事情を知って産業を興す努力を始め投資家を求めていますが、無から有を生じさせることは並大抵のことではないでしょう。何としてでも仕事を作り出し若い人に職を与える必要がありますが、学生自体にも重労働もするくらいの心構えがないとなかなか働き場は見つからないでしょう。

落成式② 生徒が整列し、校長が前に立っている

五、将来への展望

様々な問題をかかえつつも、改善への努力がないわけではありません。新教育開発委員会の下に、種々の改革案が作成されている模様です。今日、問題点だけに明け暮れしてはいられなくなりました。早く解決の糸口を見つけないとネパールの教育行政そのものが全滅するという危機感さえ流れています。

まず第一に教育者の質の向上です。先生がきちんと教えられないと学ぶ方も良く学べません。単なる知識伝達だけでなく、少ない知識や資料から創り出す工夫でしょう。教育は人からあるものを掘り出すことだと言われるように、教師は学生に動機づけをし、足りない教材をフルに利用し最大に学ぶ機会を提供するべきでしょう。

第二に就学後の落伍者を減らすことです。小学校に入っても家の仕事や学用品が買えないことで学校へ来なくなる子供が田舎にはたくさんいます。それをくい止めようと教師は努力しているでしょうが、更なる努力が必要だと思います。女の子の教育に対する関心の少ない所では、色々な理由をつけて学校をやめさせる親がいるのを知っています。勉強したってどんな益があるのか、そんなことより弟や妹を世話する方がましだと考えてしまうので、なかなか女子教育はむずかしいのです。しかし教育を受けた女性が大人になって子供を育てる時、衛生知識があれば、算数を知っていれば、お金を上手に使うことができるしその他の生活向上にどれ程役立つかわかりません。

第三に都会と地方の学校の較差を少なくしていくことは一層むずかしいことでしょうが、これを放っておけば様々な問題が生じます。知識人の都市部への流入はネパールでも著しい現象です。これをそのままにしておくと農村部を支えていく人材が少なくなるばかりでなく、農村を強化していくことさえできなくなります。較差を少なくするばかりでなく、地方での職場をふやすことも大切でしょう。

最後にひとつうれしいニュースは、ネパール政府はこれから環境教育を義務化し生徒たちに自然を愛し守ることを教えていくということです。旅行者は誰れでも気付いているのですが、ヒマラヤには木がなくなっており、そのため土砂くずれ、洪水が頻繁に起っています。また都市部は人口増加で上水が足りなくなり、下水道は全くないという現状です。カトマンズなどの排気ガスで空気は汚れ、川も目もあてられない汚染ぶりです。

将来を担う子供たちがその事実を知るだけでなく解決の道をみつけて解決への努力をする教育こそ、今ネパールに求められている教育の方向ではないかと思います。資源の少ないネパールですが、遅ればせながら教育の実質向上を計る努力は教育者のみならず、すべての国民が考え担って行くべきことなのです。

人まかせの教育から親子そろって建てる教育。ひいては国全体が一丸となってネパールの教育再建に向かって行く時が来ています。

（言語学者・ネパール在住）

落成式③ 村人の踊りの披露

蝶を庭に呼ぶ

清水　博文

自然環境の保全が叫ばれている現在、特に都市部においては顕著に自然が失われていっています。山岳博物館のある大町市でも10年前の蝶の分布記録と較べますと、現在では見ることができない種もあります。これらの蝶は山地に生息しているものより、どちらかというと平地、それも人里付近に生息していたものが多いように思われます。

全国各地で、緑を少しでも増やそうと公園の中に植物を植えたり、街路樹を植えたりと、緑地を増やす努力がなされてきましたが、生物の住む環境とは言えないものがほとんどであると思われます。最近ではただ緑地を増やすという人工的な環境ではなく、今までそこにいた動物・昆虫をまた呼びもどすにはどうしたらよいのか、という考えから草木を選定し、植栽方法も少しでも自然に近い形にという方向に変わりつつあります。

哺乳動物などは、一度姿を消してしまった場所にまたもどらせるには、長い時間を必要とすると思われますが、蝶はその種の生活に必要な食草等を植えたりすると、またその場所に飛んできて、産卵し殖えるものも見られます。

実際にどんな蝶を庭に呼ぶことができて、それにはどんな植物が必要なのかということですが、住宅地など都市部の場合でも、蝶を呼びたい場所から数km以内に、目的の蝶が生息している場合は有望であると思われます。

しかし、その蝶が林などに生息する種で、明るく開けた場所を飛ぶことが少ない種（ミドリシジミ類）はむずかしいかと思います。タテハチョウ科、マダラチョウ科の蝶は、飛翔力も強く、発生地からかなり離れていても、食草を見つけて飛来することが多いようです。

食草・吸蜜植物

蝶の幼虫が成長するために食べる植物は種ごとに決まっていて、決まった植物しか食べません。これを食草と呼びます。（表参照）

成虫（蝶）になってからの餌、蜜源となるものも、種により好みが見られます。蝶は花で吸蜜するものといったイメージですが、タテハチョウ科、ジャノメチョウ科のものは、コナラ・ヤナギ等の樹液、熟果、腐果によく集まるものが多く、また動物の排泄物、死体に集まるものもあります。これは花に集まるものは草原に生息する種、樹液等を好むものは森林に生息する種、といった傾向が強いようです。

また花に集まる蝶も、種によって集まる花の好みがあります。春に出現する蝶が秋に咲く花には集まらないのは、成虫の飛ぶ季節と開花の時期とが一致していないからですが、花色によっても好みがあり、たとえばアゲハチョウは赤色の花によく集まり、モンシロチョウは、ほとんど集まらないこと等が知られています。

種	主要食草
アオスジアゲハ	クスノキ，ニッケイ
ジャコウアゲハ	ウマノスズクサ
クロアゲハ	カラタチ
アゲハチョウ	サンショウ
カラスアゲハ	キハダ
キアゲハ	ニンジン，ミツバ
モンシロチョウ	アブラナ，ハタザオ
モンキチョウ	シロツメクサ
キチョウ	ハギ，ネムノキ
ムラサキシジミ	アカガシ，アラカシ
ミズイロオナガシジミ	クヌギ，コナラ
ルリシジミ	フジなどマメ科
ウラナミシジミ	ソラマメなどマメ科
ベニシジミ	スイバ，ギシギシ
ヤマトシジミ	カタバミ
ミドリヒョウモン	スミレ類
ウラギンヒョウモン	スミレ類
イチモンジチョウ	スイカズラ
コミスジ	ハギ，ニセアカシア
ルリタテハ	サルトリイバラ
ヒメアカタテハ	ゴボウ，ヨモギ
ヒオドシチョウ	エノキ
ゴマダラチョウ	（同上）
オオムラサキ	（同上）
テングチョウ	（同上）
アサギマダラ	キジョラン，イケマ
	＊誘引植物…スイゼンジナ
ダイミョウセセリ	ヤマノイモ

表）おもな蝶とその食草

誘引植物

アサギマダラなど、マダラチョウ類が非常に好んで集まる注目すべき植物があります。ムラサキ科のハナイバナ、モンパノキ等、それにキク科のスイゼンジナです。この植物には蝶の雄が雌に対する誘引物質のフェロモンの前駆物質を含んでおり、これは交尾をするのに不可欠な物質で、これを求めて蝶が集まるといわれています。鹿児島県等ではこのスイゼンジナを庭に植えて、アサギマダラを多数呼び集めている方もいます。

用意する植物は、食草・吸蜜植物の両方準備できれば一番良いですが、食草だけで蝶を集められる事も多いようです。またマダラチョウの誘引植物は、それだけでも効果が大きいです。

植栽場所

蝶はただむやみに飛んでいるのではなく、産卵場所・吸蜜場所がある一定のコースを中心に、交尾相手を探して飛ぶことが多いようです。また、照度等との関係が強く、午前と午後と飛ぶコースが異ることが、アゲハチョウ等で顕著に見られます。そこで直射日光が一日あたる場所よりも、一日の何時間かは日陰となるような所、日向と、日陰の境目などが効果的なようです。あまり大きくない植物でしたら、鉢植にしてたまに場所を変えてみて、良い場所を探してみるのも一つの方法と思います。

蝶を庭に呼ぶには、多くの条件がありますが、最初は身近なアゲハチョウなど呼びやすい蝶から始めていけば、蝶の集まるポイントが解り、種類数も増えて行くことと思います。

山岳博物館でも、エノキを植えオオムラサキの産卵等を試みていますし、他種の食草の植栽も計画しています。

（山岳博物館学芸員）

博物館だより

特別展『第18回信州版画展』のご案内

10月30日㈮～11月8日㈰　講堂・教室ほかで信州版画協会会員の作品140点余を一堂に展示します。本展および常設展とも通常料金。ただし文化祭期間中整理券持参の方は無料。

山と博物館第37巻第10号
一九九二年十月二十五日発行
発行所　〒398長野県大町市　TEL㉒〇二一一
大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町
大糸タイムス印刷部
定価　年額　一、二三〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野四―一三三九三）